が、しかし昨今の財政事情を考えると新たに施設をつくることなどは無理であろうし、他の施設を利用するにしても国立公立関係の機関に管理させることに反対である。国立の機関では所謂役所仕事で、史料の管理が適切に行われるか否かも分からないからである。したがって私は、個人の所蔵する史料や国公立の機関で不用とされた貴重な史料を、武田製薬株式会社の杏雨書屋かエーザイ株式会社のくすり博物館に寄贈ないし、寄付することが最も早道であり、最も可能性が高く、最も安全であると考えている。もっとも単に預けてもらうのではなく、学会として正式に管理料を払うべきと考える。この管理のため会員一人が年間三〇〇円～五〇〇円支払い、学術総会の会長が学会として毎年十万円払うとすれば当分の間の管理は可能である。日本医史学会の会員であれば一定の規則を守った上で自由に閲覧できることはもちろんである。このための管理委員会を学会内に設けて史料の管理運営に当たればよい。以上の案はもちろん私の一方的な案で、杏雨書屋やくすり博物館に何も相談した訳ではなく、先方では迷惑と思うかも知れないが、可否は日本医史学会の態度如何にかかっていると思う。

二十一世紀を目前にして、日本医史学会のあり方も変わらなければならないと考えている。私の尊敬する東洋史学者宮崎市定先生は「伝統を継承するためにはそれを変えなければならず、変わらなければ自滅するだけ」と警告を発している。医史料の保存と活用に関しても学会自体がもっと積極的に行動しなければならない時期に来ていると考えている。私が平成十年（一九九八）第九九回の総会でこの問題をシンポジュームの一つとして取り上げたのも、右に述べたような私の考えからである。

26　内藤記念くすり博物館の設立と運営よりの雑感

三宅　康夫・青木　允夫

当館は内藤記念科学振興財団理事長内藤豊次（エーザイ会長）によって一九七一年創設された。設立目的の一つは医学・薬学・薬業の進歩を伝える史資料の散逸を防ぐということであったが、当時、財団もエーザイも何一つ史資料を持っていなかった。そこで史資料のご提供をお願いするキャンペーンから始めた。

各界各地の多くの方々の賛同を得て史資料が集まり、設

立三十数年たった今では、蔵書数約五万点、資料数約五万点に達している。さらに、いまでも当館の趣意、活動に賛同・共感していただける方から、寄贈・寄託が続いている。

当館の設立、資料の収集、保存・管理、活用、運営などの点についての事例と経験から本テーマについて以下に私見を述べる。

1．くすり資料館の設立

設立に当たり、その趣意や構想について幾度となく論議され、目指す「くすり資料館（のちに博物館となる）」像をできる限り具体的に描き出し、設立に参画した人達で共有化された。それを基に行事計画が策定された。これらの策定経過をいつでも、確認できる記録を作成、残すことが重要である。難しい問題に直面するときに、いつでも原点に立ち返ることができる。また、これらの記録を読むとき、当館の設立の想い、熱意がいまでも新鮮に伝わってくる。

2．史資料の収集について

(1)　目的、範囲を明確にしておくこと。

(2)　充分なスペースを確保し、品質の劣化を防ぐ収納設備を準備する。

(3)　寄贈をいただく場合、骨惜しみせず、取捨選択せず、一括して受納する。

(4)　受納した史資料は記録を明記した台帳（パソコンに入力）を整備する。

(5)　寄贈いただけない家宝のようなものは、寄託として積極的に受け入れる。

3．保存管理について

(1)　資料収集は大変であるので、資料収集で終わりと思いがちである。本当に大変なのは維持管理、活用である。

(2)　資料の継続登録、資料活用後の確実なる戻し、定期棚卸しを実施する。

(3)　品質劣化対策として防虫・防黴対策と定期検査を実施する。

4．調査・研究・活用について

(1)　収蔵資料について目録の作成やコンピューター入力など活用のためのシステムを構築する。

(2)　閲覧・使用に便利なシステムを構築すると同時に、当博物館における資料について自ら調査・研究活動に注力する。

(3)　調査・研究成果を常設展示、テーマを定めた企画展示に活用する。展示は興味が湧き、理解しやすい解説に心がける。

企画展示は年1回以上開催し、展示に合わせて図録を

発行する。

(4) 図書目録、収蔵資料集などを計画的に出版物として公開する。

(5) 当館の活動状況は年2回の「くすり博物館だより」を発行し、関係者や来館者に活動状況をお知らせする。

5．まとめ

資料を集めることは、一時の熱意で程度の差はあるが、何とかできよう。問題は、その後の継続収集と維持管理、活用である。このことをよく考えて、どのような資料館（または室）を設立しようとするか、コンセプトを明確にする必要がある。

これらを実行するためには、この仕事が好きで能力ある人材も必須である。それと継続性を保証する財政的基盤である。本テーマのキー・フレーズは「コンセプト」「継続」「ヒト」「金」です。

27　三輪卓爾

一口に医史料と言っても性格はさまざまだが、その扱いは大別すれば中央化する方向と個別に対処するものとになりましょう。史料館を造るというのは前者の代表的なもので、後者には覆刻版の作製といった例が考えられます。覆刻版を万人に入手可能な形で世に送ることは多くの場合至難と思うが、それが史料館的な場所での入手・寄贈その他である程度行き渡っていれば、利用価値は倍増といった域に止まらないと思います。

医史料館の創設に関しては少なくとも検討の進められたものを一、二件聞いたように思うが、もし幸いに複数が緒につくのであれば、なろうことなら一地域に偏在しないことを望みます。難しい問題が多々あろうことを予想の上で言うなら、医学部図書館の分館（分室?）のような形にはできないものか、知恵者の多い会員各位の叡知にまちたいと思います。

最後に、学会誌の編集委員として、十年近く前に「史料との出会い」というシリーズものを企画しお願いしたことがありますが、数名の方で頓挫したままです。今回の動向とからんで再度推進して頂けたらと思っています。